

# 11 コケ植物



## 11 コケ植物

2014～2019年に、過去のRDB掲載種の記録がある一部の地域で現地調査を行った。また、現地調査と並行して広島県産コケ植物に関する文献調査を行った。これらの調査結果を検討し、苔類16種と蘚類38種を広島県RDB種として選定した。内訳はつぎのとおりである。絶滅危惧Ⅰ類苔類12種、蘚類25種、絶滅危惧Ⅱ類苔類2種、蘚類7種、準絶滅危惧種苔類2種、蘚類3種、情報不足蘚類3種。選定種数としては2011年度と同じであるが、苔類のイチョウウキゴケを絶滅危惧Ⅰ類から準絶滅危惧に、また、蘚類のイブキタチヒダゴケを絶滅危惧Ⅰ類から情報不足に変更した。イチョウウキゴケについては、個体数が一時期急激に減少したが、近年の調査では数は減少したものの県内の広範囲にわたって生育が確認されたため、準絶滅危惧にカテゴリーを1段階下げた。また、イブキタチヒダゴケについては、これまで1点のみの標本で県内から報告され、その後50年以上再確認されていないため、情報不足に変更した。その他選定種については2011年度と同評価である。

コケ植物、シダ植物、種子植物を含む陸上植物は、配偶体と孢子体の二つの体をもつのが特徴である。配偶体は精子（精細胞）や卵細胞をつくる体で、孢子体は孢子をつくる体である。シダ植物や種子植物の目に見える体のすべてが孢子体であり、配偶体はずっと小形で、特に被子植物の場合は数細胞程度の大きさしかない。それに比べてコケ植物の配偶体は比較的大形で、目にする緑色のコケの体は配偶体からなっている。反対にコケ植物の孢子体は小形で、配偶体に着生したまま成長し、独立して生育することはない。コケ植物の本体である配偶体は、孢子体に比べれば大きくはあるが、その他の陸上植物の本体である孢子体に比べればずっと小さく、多くの種は数mm程度の大きさしかない。ただ小形の種であっても、密な群落をつくって生育するため、野外でその存在に気づくことができる。

コケ植物には系統の異なるセン（蘚）類とタイ（苔）類、ツノゴケ類の3群があり、世界で約2万種が知られている。セン類は世界で約1万種が知られ、日本に約1,030種、広島県に485種の生育記録がある。タイ類は世界で約8,000種が知られ、日本に約600種、広島県に227種が記録されている。ツノゴケ類は世界で約400種が知られ、日本に17種、広島県に7種の生育が記録されている。日本国内において、広島県はコケ植物相が比較的明らかになっている地域の一つである。

コケ植物は根や維管束をもたず、水分や養分は体全体から吸収している。そのため、環境の変化に敏感で、湿度の変化、大気や水質汚染によって個体数がすぐに激減することになる。その生育は周囲の環境に依存するため、別の場所に移殖して保全することはほとんど不可能である。コケ植物の体は非常に小さいのだが、その個体群を維持させるためには、周囲の生育環境全体を保全する必要がある。コケ植物が周囲の環境に依存して生育するという事は、生育するコケ植物によってその地域の環境をある程度推定することが可能となる。このような環境を反映するような植物を指標植物と呼んでいるが、コケ植物は指標植物として適した植物群と言える。レッドデータブックに掲載されたコケ植物は、ほとんどが自然度の高い環境に生育する種である。これらの種が今後も生育できるような環境を残していきたい。

(山口富美夫)

### コケ植物選定種

#### 絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）

- 1 ニシムラヤバネゴケ
- 2 チチブブシュカンゴケ
- 3 マエバラヤバネゴケ

- 4 コモチハネゴケ
- 5 カミムラヤスデゴケ
- 6 ヒメシロクサリゴケ
- 7 シロクサリゴケ

- 8 ヨウジョウゴケ
- 9 カビゴケ
- 10 モーリッシュシゲリゴケ
- 11 ミミケビラゴケ

- 12 テガタゴケ
- 13 ヒメミズゴケ
- 14 ウロコミズゴケ
- 15 クロゴケ
- 16 キセルゴケ
- 17 クマノチョウジゴケ
- 18 セイタカヤリカツギ
- 19 サンカクキヌシッポゴケ
- 20 ヤマトハクチョウゴケ
- 21 ミヤジマキンシゴケ
- 22 クロコゴケ
- 23 イサワゴケ
- 24 ジョウレンホウオウゴケ
- 25 タチチョウチンゴケ
- 26 コキジノオゴケ
- 27 クロカワゴケ
- 28 コシノウスグロゴケ
- 29 ヒロハシノブイトゴケ
- 30 キャラハラッコゴケ
- 31 ササオカゴケ
- 32 イトヒバゴケ
- 33 トサヒラゴケ
- 34 キブリハネゴケ
- 35 イヌコクサゴケ
- 36 カトウゴケ
- 37 ムチエダイトゴケ

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 1 ツボゼニゴケ
- 2 ヤワラゼニゴケ
- 3 ホソベリミズゴケ
- 4 コアナミズゴケ
- 5 クマノゴケ
- 6 ホンモンジゴケ
- 7 ホゴケ
- 8 コウヤトゲハイゴケ
- 9 ヒメスズゴケ

準絶滅危惧 (NT)

- 1 ウキウキゴケ
- 2 イチョウウキゴケ
- 3 オオミズゴケ
- 4 マツムラゴケ
- 5 セイナンヒラゴケ

情報不足 (DD)

- 1 キブネゴケ
- 2 イブキタチヒダゴケ
- 3 カワゴケ

ニシムラヤバネゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Hygrobrella nishimurae* N.Kitag.

苔類 カサナリゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	植物体は微小で、茎ははい、葉をつけた枝が斜上するか直立する。枝は長さ 0.5~1 cm, 幅は葉を含めて 0.8~1 mm, ときに枝先は鞭枝状に細くなる。葉(側葉)は小形で縦に二つに折りたたまれ、葉の折れ目(キール)に翼があり、茎の両側に並んで扁平につく。腹葉はない。エゾヒメヤバネゴケに似るが、腹葉を欠くことで区別できる。本州、九州のほか、韓国の済州島に分布する。
生息・生育状況	自然林内、溪流沿いの湿った斜面上で、小さな流れ沿いにある湿岩上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然度の高い溪畔林内にあり、森林伐採や林道工事などの影響を受けやすい。
特記事項	本種の属するエゾヒメヤバネゴケ属( <i>Hygrobrella</i> )は、これまでヤバネゴケ科( <i>Cephaloziaceae</i> )に含まれていた。しかし、Shaw ほか(2015)は、ツボミゴケ亜目の分子系統解析の結果から、エゾヒメヤバネゴケ属がカサナリゴケ科( <i>Antheliaceae</i> )に含まれることを明らかにした。
産地情報	安芸太田町(加計)

Kitagawa N. 1982. A remarkable new species of *Hygrobrella* from Japan. Misc. Bryol. Lichenol., 9(4): 69-72.

Shaw B., Crandall-Stotler B. J., Váňa J., Stotler, R. E., Konrat M. von, Engel J. J., Davis E. C., Long D. G., Sova P. & Shaw A. J. 2015. Phylogenetic relationships and morphological evolution in a major clade of leafy liverworts (phylum Marchantiophyta, order Jungermanniales): suborder Jungermanniineae. Syst. Bot., 40(1): 27-45.

(山口富美夫)

チチブブシュカンゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Mesoptychia chichibuensis* (Inoue) L.Söderstr. & Váňa

苔類 ツボミゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	微小な苔類で、茎ははい、長さ 0.5~1 cm, 茎は葉を含めて幅 0.8 mm 以下。葉は茎の両側に並んでつき、先端は二つに分かれ、腹葉は大きい。腹葉が大きく、葉細胞に不規則な突起(バルカ)があることが本種のよい特徴である。日本の固有種で本州の石灰岩地帯に分布する。
生息・生育状況	山地の石灰岩地帯で、湿潤な石灰岩の岸壁上にまれに生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限定されており、石灰岩地帯での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	広島県 2011 年版では、和名をイシバイイチョウゴケとしていた。本種が元の <i>Lophozia</i> 属から <i>Leiocolea</i> 属に組み替えられるのにもない、和名がチチブブシュカンゴケに改められた。本種は現在 <i>Mesoptychia</i> 属に組み替えられている。
産地情報	庄原市(東城), 神石高原町(神石)

Kitagawa, N. 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions. II. J. Hattori Bot. Lab. 29: 101-149.

古木達郎・水谷正美 2004. 日本産タイ類ツノゴケ類チェックリスト, 2004. 蘚苔類研究 8(10): 296-316.

(山口富美夫)

マエバラヤバネゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Mesoptychia mayebarae* (S.Hatt.) L.Söderstr. & Váňa  
 苔類 ツボミゴケ科

環境省: なし  
 広島県 2011: CR+EN  
 広島県 2003: CR+EN

概要	微小な苔類で、茎ははい、長さは約 0.5 cm、幅は葉を含めて 0.4~0.8 mm。葉は茎の両側に並んでつき、葉の先端は不等に二つに分かれる。近縁種とは腹葉が小さく痕跡的になることで区別される。日本の固有種で、北海道、本州、四国、九州の石灰岩地に分布する。
生息・生育状況	山地の石灰岩地帯で、湿潤な石灰岩の岸壁上にまれに生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限定されており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	庄原市（東城）、神石高原町（神石）

Kitagawa, N. 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions. II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101-149.

Váňa J., Söderström L. Hagborg A. & von Konrat M. 2012. Notes on early land plants today. 8. New combinations and some lectotypifications in *Mesoptychia*. Phytotaxa, 65: 52-56.

(山口富美夫)

コモチハネゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Xenochila integrifolia* (Mitt.) Inoue  
 苔類 ツボミゴケ科

環境省: なし  
 広島県 2011: CR+EN  
 広島県 2003: CR+EN

概要	茎は立ち上がり、長さ 1 cm くらいになり、仮根が葉の基部につく。茎は横にはい、先は急に直立してひも状となり、無性芽をつける。葉は茎の両側に並んで密に重なり、円みのある三角形で全縁。一見するとハネゴケ属の苔類に似ているが、仮根が葉の基部から束になって生えること、茎の先端が細くなって無性芽を付けることで区別できる。本州、四国のほか、韓国、台湾、ヒマラヤに分布する。
生息・生育状況	自然林内、溪流沿いの湿った岩や腐木上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林内の溪流沿いに限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。生育する個体数が少なく、個体群もきわめて小さい。
特記事項	本種が属するコモチハネゴケ属 ( <i>Xenochila</i> ) は、これまでハネゴケ科 (Plagiochilaceae) に含まれてきたが、Patzak ほか(2016)は分子系統解析からツボミゴケ科 (Jungermanniaceae) に所属を変更した。
産地情報	廿日市市 (吉和)

Inoue H. 1963. Contribution to the knowledge of Plagiochilaceae of southern Asia IV. The genus *Xenochila*. Bull. Natt. Sci. Mus. Tokyo, ser. b, 6: 372-377.

Patzak S. D. F., Váňa J., Renner M. A. M. & Heinrichs J. 2016. Transfer of the leafy liverwort *Xenochila* from Plagiochilaceae (Lophocoleineae) to Jungermanniaceae (Jungermanniineae). Plant Syst. Evol., 302: 891-899.

(山口富美夫)

カミムラヤスデゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Frullania brotheri* Steph.

苔類 ヤスデゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎はほうか立ち上がり、長さは3~5 cm、赤褐色で不規則に分枝し、葉は茎の両側に並んで重なり、楕円形で、葉の下端が腹側に折れ曲がって袋状からこん棒状となり、茎に対して横向きから下垂する。腹葉は大きく、円形で先端は2裂し、基部は耳状にふくらむ。サカワヤスデゴケ ( <i>F. sackawana</i> ) に似ているが、サカワヤスデゴケの腹葉基部は耳状にならない。関西以西の本州、四国、九州、琉球列島のほか、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンに分布する。
生息・生育状況	花崗岩峰のコウヤマキ林内の岩上または腐植土上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育場所と環境が限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	廿日市市 (佐伯)

湯澤陽一 2000. 日本産ヤスデゴケ属 (ヤスデゴケ科, 苔類) 1. 自然環境科学研究 13: 1-24.

岩月善之助 (編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

ヒメシロクサリゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Cheilolejeunea japonica* (Horik.) W.Ye & R.L.Zhu

苔類 クサリゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は横にはい、長さ1~2 cm、幅は葉を含めて約0.9 mm。葉は茎の両側に並んでつき、すこし重なる。葉は楕円形で全縁、葉の一部は腹側に折れ曲がり、腹片となる。腹葉は茎の幅の3~4倍で、円形。シロクサリゴケ ( <i>C. xanthocarpa</i> ) に似ているが、本種はシロクサリゴケより小さく、葉先のみが内曲することで区別される。日本の固有種で長野県以西の本州と九州に分布する。
生息・生育状況	自然度の高い森林内の樹幹上に着生する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地が自然林内に限定されており、森林伐採や林道開発などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	大竹市, 廿日市市 (佐伯, 宮島)

Mizutani M. 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

Ye W. & Zhu R.-L. 2010. *Leucolejeunea*, a new synonym of *Cheilolejeunea* (Lejeuneaceae), with special reference to new combinations and nomenclature. J. Bryol., 32(4): 279-282.

(山口富美夫)

シロクサリゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Cheilolejeunea xanthocarpa* (Lehm. & Lindenb.) Malombe

苔類 クサリゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は横にはい、長さ 2~3 cm、幅は葉を含めて 1.5~1.9 mm、ヒメシロクサリゴケより大きい。葉は茎の両側に並んでつき重なる。葉は楕円形で全縁、葉縁が著しく内曲する。葉の一部は腹側に折れ曲がり、腹片となる。腹葉は茎の幅の 3~4 倍で、円形。ヒメシロクサリゴケに似るが、本種は葉縁全体が著しく内曲することで区別される。愛知県以西の本州、四国、九州、琉球列島のほか、世界の熱帯に広く分布する。
生息・生育状況	自然度の高い森林内の岩上に、ほかのコケ植物と混生することが多い。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地が自然林内に限定されており、森林伐採や林道開発などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	広島市 (佐伯区)、廿日市市 (佐伯、宮島)

Mizutani M. 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

Malombe I. 2009. Studies on African *Cheilolejeunea* (Lejeuneaceae) I: new species and new combinations. Acta Bot. Hung., 51: 315-328.

(山口富美夫)

ヨウジョウゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Cololejeunea trichomanis* (Gottsche) Steph.

苔類 クサリゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	葉は基物に密着して横にはい、長さ約 10 mm。葉は茎の両側に並んでつき重なる。葉は楕円形で縁に微小な歯があり、透明細胞はない。葉の腹片の先端に 2 歯があり、下側の歯は 2 細胞で長い。腹葉はない。ヒメクサリゴケ属 ( <i>Cololejeunea</i> ) の苔類は複数の種が広島県から報告されているが、本種は葉の背面に低いパピラがあり、葉縁の透明細胞を欠き、葉の腹片の下側の歯 (第 1 歯) が 2 細胞で、上側の歯 (第 2 歯) が単細胞で尖ることなどで区別される。関東地方以西の本州、四国、九州、琉球列島のほか、東アジアから東南アジアに分布する。
生息・生育状況	自然度の高い湿った森林中の常緑広葉樹の生葉、樹幹、岩上などに生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地が自然林内に限定されており、森林伐採や林道開発などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	廿日市市 (宮島)、安芸太田町 (加計、筒賀、戸河内)

Mizutani M. 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

Grolle, R. 2001. Miscellanea hepaticologica 291-300. Haussknechtia 8: 59-69.

(山口富美夫)



**カビゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②**

*Leptolejeunea elliptica* (Lehm. & Lindenb.) Besch.

苔類 クサリゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	ヤブツバキやヒサカキなど生きた常緑広葉樹の葉面などに着生し、茎は葉面に密着して横にはい、長さ5~10 mm、淡緑色。葉は楕円形で先端がやや尖り、茎の両側に並び、互いに離れてついて重ならない。葉の一部が腹側に折れ曲がり、腹片となる。葉には大形の細胞が5~10個散在し、それに油体がつまっている。この油体はエチルアニソールを含有し、ハッカに似た芳香があり、生育地の渓谷にはいっただけでその特有の香りがわかる。日本には4種のカビゴケ属苔類が知られているが、広島県に分布するのは本種のみである。福島県以南の本州、四国、九州、琉球列島のほか、世界の亜熱帯、熱帯地方に広く分布する。
生息・生育状況	空中湿度の高い渓谷内の常緑広葉樹やシダ類などの生きた葉の上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	—
特記事項	生育には空中湿度の高い環境が必要であり、森林伐採や開発などにより生育環境の減少が危惧される。
産地情報	広島市(安佐北区, 佐伯区), 竹原市, 大竹市, 廿日市市(廿日市, 宮島), 安芸高田市(高宮), 安芸太田町(加計, 筒賀)

Mizutani M. 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

**モーリッシュシゲリゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②**

*Tuyamaella molischii* (Schiffn.) S.Hatt.

苔類 クサリゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は基物に密着して横にはい、長さ5~10 mm。葉は卵形で全縁、茎の両側に並んでつき重なる。葉の基部に羽谷細胞の集まり(ピット)があり、葉縁上半部の2~3列が透明細胞となる。葉の腹片の先端に曲がった3歯がある。腹葉はV字形に深く切れ込む。葉のピット, V字形に切れ込んだ腹葉, 葉縁の透明細胞の形態は他に似たものがなく、容易に区別できる。本州, 四国, 九州, 琉球列島, 小笠原諸島のほか, 中国, 台湾, ベトナム, マレーシアに分布する。
生息・生育状況	自然度の高い湿った森林内で、常緑広葉樹の生葉や樹幹上に着生する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地が自然林内に限定されており、森林伐採や林道開発などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	廿日市市(宮島), 安芸太田町(筒賀)

Mizutani M. 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

ミミケビラゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Radula chinensis* Steph.

苔類 ケビラゴケ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は立ち上がり、長さ 3~6 cm くらい、不規則に羽状に分枝し、枝は茎の両側に並んで重なり、卵形で二つに折りたたまれ、大きな背片と小さな腹片とに分かれる。複片が大きくて茎を完全に覆い、基部が耳形になることで、同属のほかの種から区別できる。本州のほか、台湾や中国大陸に分布する。
生息・生育状況	自然林内のやや乾いた石灰岩上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	生育地が石灰岩上に限られ、個体数が少なく個体群もきわめて小さいことから、石灰岩地の伐採や遊歩道の整備などにより、個体群の維持が危惧される。
特記事項	—
産地情報	神石高原町（油木）

Yamada K. 1979. A revision of Asian taxa of *Radula*, Hepaticae. J. Hattori Bot. Lab., 45: 201-322.

樋口正信・安藤久次 1980. 広島県帝釈峡の蘚苔類フロラと生態. 日本植物分類学会会報, 4: 5.

(山口富美夫)

テガタゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Ptilidium pulcherrimum* (Weber) Vain.

苔類 テガタゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎ははい、長さ 2~3 cm くらいで不規則に分枝する。葉は茎の両側に並んで重なり、不等に 3 または 4 裂し、各裂片の縁に長い毛がある。本種の各裂片の縁の毛は 5~10 本であり、近縁のカリフォルニアテガタゴケ ( <i>P. californicum</i> ) は 2~3 本、ケテガタゴケ ( <i>C. ciliare</i> ) は 10 本より多いことから区別される。北海道、本州、四国、九州のほか、韓国、中国、極東ロシアを含む北半球の寒冷な地域に分布する。
生息・生育状況	ブナ林中の樹幹基部に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	ブナ林内に生育地が限定され、森林伐採などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	安芸太田町（戸河内）

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

Bakalin V. A. 2019. Liverworts of the Russian Far East: the taxa with ciliate leaves. Bot. Pacif. 8(1): 85-103.

(山口富美夫)

**ヒメミズゴケ** 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Sphagnum fimbriatum* Wilson

蘚類 ミズゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、長さ 15~20 cm、密生して群生する。植物体は淡緑色で赤みを帯びない。茎につける葉は広い舌形で、先端から側方にかけてささくれる。枝は細い。本種を群落から引き離そうとすると細い枝がもつれあうが、近縁のホソバミズゴケ ( <i>S. girgensohnii</i> ) では、枝はもつれない。北海道、本州、九州の低山帯から亜高山帯に分布し、南北両半球の寒冷な地域に広く分布している。
生息・生育状況	貯水池周辺などの湿地、サクラバハハンノキなど灌木林下の半日陰になった場所で、干上がることのない、薄く水を湛えた泥沼状態の地上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	生育環境が限定されており、湿地の開発などによって生育地の減少が危惧される。
特記事項	三原市天然記念物 後藤田のヒメミズゴケ (大和町大草)。
産地情報	三原市 (大和), 三次市 (三和)

滝田謙譲 1999. 北海道におけるミズゴケの分布及びその変異について. *Miyabea*, 4: 1-84.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

**ウロコミズゴケ** 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Sphagnum squarrosum* Crome

蘚類 ミズゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、長さ 15~20 cm、密生して群生する。植物体は淡緑色で赤みを帯びない。枝は太く、長さ 1.5~2 cm、幅 3 mm くらいに達する。枝につく葉は尖り、先端が反り返るのが特徴である。植物体の大きさや全体の形はオオミズゴケ ( <i>S. palustre</i> ) に似るが、葉が反り返ってウロコ状に見えるので区別できる。北海道、本州、四国のほか、北半球の寒冷な地域に広く分布する。
生息・生育状況	ブナ林下の半日陰の湿地上に群生する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	ブナの自然林内の湿地に限って生育しており、森林伐採などの人為的攪乱の影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	庄原市 (西城), 安芸太田町 (戸河内)

Suzuki H. 1967. Notes on the section *Squarrosa* of *Sphagnum* in Japan. *J. Sci. Hiroshima Univ. ser. B, div. 2*, 11: 247-264.

松岡成久・秋山弘之 2019. 兵庫県新産のウロコミズゴケ (セン類植物門ミズゴケ科). *蘚苔類研究*, 12(2): 60-61.

(山口富美夫)

クロゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Andreaea rupestris* Hedw. var. *fauriei* (Besch.) Takaki

蘚類 クロゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、長さ 0.5~1 cm、数本ずつ集まって散生する。植物体は黒褐色で緑色を帯びない。葉は長楕円形で基部は卵形、中肋はなく、細胞は不規則な六角形で、背面にパピラがある。蒴はほかの蘚類と著しく異なり、側面が縦に四つに裂け、頂端はくっついたままになる。植物体の全形はギボウシゴケ属 ( <i>Grimmia</i> ) 蘚類と似ているが、本種は葉がバイオリンのような形をしていて、中肋がなく、葉細胞に大きなパピラがあることで区別できる。北海道、本州、四国、九州のほか、中国大陸と朝鮮半島に分布する。
生息・生育状況	山頂付近の日当たりがよくて風当たりの強い岩上、あるいは渓谷沿いの日当たりのよい火山岩上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境が限定されており、森林伐採や遊歩道の整備などによる環境変化の影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	広島市 (佐伯区)、庄原市 (西城)、廿日市市 (大野、佐伯)、安芸太田町 (戸河内)

Takaki N. 1954. General aspect of vertical distribution of mosses of Mt. Fuji (Japan). J. Hattori Bot. Lab., 11: 87-92.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

キセルゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Buxbaumia aphylla* Hedw.

蘚類 キセルゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	配偶体はきわめて微小で、原糸体が緑色のカーペット状に広がり、その中から孢子体が直立する。和名は孢子体の形が煙管 (きせる) に似ることによる。孢子体は高さ 1.5~2 cm、蒴は長さ 3~4 mm で、扁平でうちわ状に広がり、側面に稜がある。蒴柄には密にパピラがある。原糸体が目立ち、蒴が扁平になることで近縁のクマノチョウジゴケ ( <i>B. minakatae</i> ) から区別できる。北海道、本州、四国、九州のほか、ヨーロッパ、中国、極東ロシア、北米、ニュージーランドに分布する。
生息・生育状況	山地の歩道傍など、ほかのコケ類や草本類の少ない腐植土上にまれに生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	林内にまばらに生育し、安定して存続する群落は知られておらず、山中を歩いていて偶然見つけるような状況である。生育地を限定できないので保護することは難しいが、自然度の高い森林を維持する。
特記事項	別名ウチワチョウジゴケ。
産地情報	広島市 (佐伯区)、三次市、廿日市市

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

クマノチョウジゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Buxbaumia minakatae* S.Okam.

蘚類 キセルゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	配偶体はきわめて微小で、キセルゴケのような緑色の原糸体は顕著ではない。胞子体は直立し、キセルゴケよりも小形で、高さ 0.6~0.8 mm。蒴は円筒形で傾き、長さ 3~4 mm で、蒴柄は蒴とほぼ同長。蒴が扁平とならず円筒形になることでキセルゴケから区別できる。北海道、本州、四国、九州のほか、東アジア、北米の東部に分布する。
生息・生育状況	林内の湿った腐木上にまれに生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	キセルゴケと同様に、安定して存続する群落は知られていない。自然度の高い森林を維持するのが望ましい。
特記事項	—
産地情報	広島市 (安佐北区, 佐伯区), 廿日市市 (佐伯)

野口 彰 1935. 日本産ちょうじごけ類蘚類図説. 植物研究雑誌, 11(4): 267-275, pl. II.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

セイタカヤリカツギ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Encalypta streptocarpa* Hedw.

蘚類 ヤリカツギ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、高さ 2~10 cm に達するが、県内のもは小形で 5 mm くらいの高さで、分枝せず、2~3 本が集まって生えている。葉はへら形で、長さ 3~4 mm, 中肋は太く、葉の先端には届かないが、背面上部に歯がある。葉細胞は方形~六角形で、多くの小さいパピラがある。センボンゴケ科の蘚類によく似ているが、葉腋に糸状の無性芽をつけるのが本種の特徴である。北海道、本州、四国のほか、ヨーロッパ、トルコ、イランに分布する。
生息・生育状況	石灰岩の岩壁で、直接雨露があたらない部分に散生する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限定されており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	本種はこれまで <i>Encalypta procera</i> として報告され、和名をシナノセンボンゴケとしていた。その後、岩月ほか(2008)の研究により、日本から報告されてきた <i>E. procera</i> は <i>E. streptocarpa</i> 同定の誤りであるとされた。 <i>E. streptocarpa</i> に対しては、セイタカヤリカツギの和名が与えられている。
産地情報	神石高原町 (神石)

Iwatsuki Z. 2004. New Catalog of the Mosses of Japan. 182 pp. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

岩月善之助・鈴木 直・木口博史 2008. 日本に生育する糸状の無性芽を持つ *Encalypta* (ヤリカツギ属) の種. 蘚苔類研究, 9(10): 311-318.

(山口富美夫)

サンカクキノシッポゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Seligeria patula* (Lindb.) Lindb. ex I.Hagen var. *alpestris* (T.Schauer) Gos & Ochyra

蘚類 キヌシッポゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	微小な蘚類で、茎は直立し、高さ 1~2 mm、葉は卵形の基部から線形に伸び、長さ 0.7~1.2 mm、茎の基部に群がってつく。葉は横断面が三角形で、中肋があり、ほぼ 3 列に茎につく。胞子体は葉より少し長く、蒴は球形で、蓋のくちばしは長い。葉の横断面は三角形で、中肋上部の横断面は 2 層の細胞からなることで近縁の種から区別される。本州、四国、九州の石灰岩地帯のほか、ヨーロッパに分布する。
生息・生育状況	湿った石灰岩岩壁に群生するが、植物体が微小なため肉眼では識別困難である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限定されており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	庄原市(東城), 神石高原町(神石)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

Suzuki T., Iwatsuki Z. & Kiguchi H. 2006. The family Seligeriaceae (Bryopsida) in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 100: 469-493.

(山口富美夫)

ヤマトハクチョウゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Campylostelium brachycarpum* (Nog.) Z.Iwats., Yuk.Tateishi & Tad.Suzuki

蘚類 チヂレゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、高さ 1~2 mm、葉は線形で、長さ 1~1.5 mm、先端は尖り、中肋は葉頂に達する。葉細胞は方形で、細胞壁は厚くて平滑。蒴柄は白鳥の首のように湾曲し、蒴は卵形で、蓋のくちばしは長い。シッポゴケ科蘚類の未熟な個体に似るが、湾曲する蒴柄が特徴的である。本州、四国、九州のほか、北米東部に分布する。
生息・生育状況	自然林内の日陰でやや湿った岩上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林内の限られた場所であり、森林伐採や植生遷移、その他の自然要因の影響を受けやすい。生育する個体数が少なく、個体群もきわめて小さい。森林全体としての環境の保全が重要である。
特記事項	本種はハクチョウゴケ属( <i>Campylium</i> )に属し、ギボウシゴケ科( <i>Grimmiaceae</i> )に含まれていたが、Fedosov ほか(2017)による分子系統解析の研究の結果、チヂレゴケ科( <i>Ptychomitriaceae</i> )に含まれることが明らかにされた。
産地情報	なし

Iwatsuki, Z., Tateishi, Y. & Suzuki, T. 1999. *Campylostelium* in Japan. *Hikobia*, 13: 79-85.

Fedosov V. E., Fedorova A. V. & Ignatova E. A. 2017 [2016]. On the taxonomic position of the genera *Brachydontium* Fűrnr. and *Campylostelium* Bruch & Schimp. (Bryophyta, Grimmiiales). *J. Bryol.*, 39(2): 161-170.

(山口富美夫)

ミヤジマキンシゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Ditrichum sekii* Ando & Deguchi ex Matsui & Z.Iwats.

蘚類 キンシゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、高さ 3~10 mm、葉は卵形の基部から線形に長く伸び、茎の根元に群がって小さいススキの株ようになる。胞子体は長さ 3~4 cm、葉の間から直立して、細長い円柱形の策を傾けてつける。葉の基部の細胞が方形で、葉の先端部の断面が円形になることで近縁の種から区別できる。日本の固有種で、本州、四国、九州に分布する。
生息・生育状況	山地の歩道傍で、ほかのコケ類や草本類などが茂らない地上に散生する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	森林伐採や開発などによる生育地の消失、縮小が危惧される。
特記事項	—
産地情報	廿日市市 (宮島), 安芸太田町 (戸河内)

Matsui T. & Iwatsuki Z. 1990. A taxonomic revision of the family Ditrichaceae (Musci) of Japan, Korea and Taiwan. J. Hattori Bot. Lab., 68: 317-366.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

クロコゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Luisierella barbula* (Schwägr.) Steere

蘚類 センボンウリゴケ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	微小な蘚類で、茎は直立し、高さ 1~1.5 mm、葉は舌形で、長さ 1.2~1.5 mm、先端は円く、中肋は葉頂に達しない。葉細胞は円みのある方形で、葉の腹面側に円く膨れて突出する。本種は石灰岩上に生育するが、同じ環境に生育する種とは葉形や葉細胞の特徴から区別される。本州、四国、九州、琉球列島の石灰岩地帯にまれに分布し、中国、インドネシア、西インド諸島、北米、中米、ブラジルからも知られている。
生息・生育状況	日陰でやや乾いた石灰岩上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限定されており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	本種が属するクロコゴケ属 ( <i>Luisierella</i> ) はセンボンゴケ科 ( <i>Pottiaceae</i> ) に含まれていたが、近年の分子系統解析によって、センボンウリゴケ属 ( <i>Timmiella</i> ) とともに、センボンウリゴケ科 ( <i>Timmiellaceae</i> ) として独立した科に含まれることが明らかになった。
産地情報	庄原市 (東城), 神石高原町 (神石)

Deguchi H. 1987. *Luisierella* (Pottiaceae, Musci), a moss genus with a disjunctive distribution in Neotropics and Japan. J. Jpn. Bot., 62: 7-15.

Inoue Y. & Tsubota H. 2014. On the systematic position of the genus *Timmiella* (Dicranidae, Bryopsida) and its allied genera, with the description of a new family Timmiellaceae. Phytotaxa, 181(3): 151-162.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

イサワゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Syrrhopodon tosaensis* Cardot

蘚類 カタシロゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、高さ 6~10 mm、植物体は自緑色で、乾いてもあまり縮まない。葉は披針形で、縁に透明な 2 または 3 細胞列からなる舷がある。葉細胞にはパピラがあり、その先端は 2 または 3 個に分かれる。葉の先端背面にやや内側に曲がった歯が集まってつく。近縁のカタシロゴケ( <i>S. japonicus</i> ) の葉細胞のパピラは細胞の上端にあるが、本種では中央にあることで区別できる。中部地方以西の本州、四国、九州、琉球列島のほか、中国大陸、台湾、タイに分布する。
生息・生育状況	自然林内の溪流沿いなど湿度の高い場所の樹幹上や岩上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	生育地は自然林内の渓谷部に限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。生育する個体数が少なく、個体群もきわめて小さい。
特記事項	—
産地情報	廿日市市 (宮島)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

ジョウレンハウオウゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Fissidens geppii* M.Fleisch.

蘚類 ホウオウゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は直立し、高さ 3~10 mm、茎の両側に葉を扁平につけ、葉の基部はアヤメの葉のように茎を抱き込む。葉は狭い披針形で、縁には舷とよばれる細長い細胞が並び、葉の先端で急に消える。中肋は葉の先端より突出する。エゾハウオウゴケ ( <i>F. bryoides</i> ) に似ているが、エゾハウオウゴケの葉の舷は弱く、明瞭でないので区別できる。本州、四国、九州のほか、中国大陸、アジアの亜熱帯、熱帯に分布する。
生息・生育状況	森林内のほか、人家周辺の湿った土上や岩上に小さなコロニーをつかって生育する。微小な蘚類であるため野外での識別が困難であり、生育の状況を判定するのも困難である。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	森林伐採などによる生育地の消失を防止する。
特記事項	—
産地情報	広島市 (安佐北区, 佐伯区), 呉市 (蒲刈), 三原市, 廿日市市 (廿日市, 佐伯, 宮島)

Iwatsuki Z. & Suzuki T. 1982. A taxonomic revision of the Japanese species of *Fissidens* (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 51: 329-508.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)



タチチョウチンゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Orthomnion dilatatum* (Wilson ex Mitt.) P.C.Chen

蘚類 チョウチンゴケ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は横にはい、長さ 5~10 cm, 密に褐色の仮根をつけ、不規則に分枝する。葉は楕円形で、長さ 5~8 mm, 全縁、乾くと著しく縮む。中肋は葉の先端近くで消える。葉細胞は六角形、細胞壁にはくびれがある。短い直立する枝を出して胞子体をつけ、蒴は葉の間から少し見えるくらいの長さの円筒形で、直立するのがよい特徴である。胞子体のない場合は、アツパチョウチンゴケ ( <i>Plagiomnium succulentum</i> ) に似ているが、本種の仮根は褐色で密生し、中肋は葉頂よりも下で消失することで区別できる。神奈川県以西の本州、四国、九州のほか、中国、東南アジアに分布する。
生息・生育状況	湿度の高い常緑広葉樹林や社叢林内の樹幹上に着生する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地が限られており、個体数も少ないため、伐採などによる環境の変化に留意する。
特記事項	—
産地情報	庄原市

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

コキジノオゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Cyathophorum hookerianum* (Griff.) Mitt.

蘚類 クジャクゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	葉は 2 型あり、側葉を茎の両側に偏平に並んでつけ、腹葉は腹面に 1 列に並ぶ。二次茎は先端がしだいに尖り、鳥羽根状となり、先端部に多数の無性芽をつける。淡緑色で、光沢はなく、乾くと縮れ、白っぽくなる。側葉は歪んだ卵形で、長さ 2.5~3 mm, 先端は尖り、中肋は 1 本で、葉の中部以下で終わる。葉縁には長い細胞からなる舷があり、全縁。葉細胞は六角形で、細胞壁はくびれる。腹葉は円形で、先端は細く尖る。キジノオゴケ ( <i>C. adiantum</i> ) に似るが、キジノオゴケでは葉縁に棘状の長い歯がある。中部地方以西の本州、四国、九州、琉球列島のほか、中国、東南アジアに分布する。
生息・生育状況	自然度の高い溪谷の岩上や樹幹上に群生する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然度の高い溪谷部に限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。
特記事項	本種はこれまでヒメソテツゴケ ( <i>Cyathophorella kyusyuensis</i> ) に近縁で、腹葉の縁に舷がなく、中肋をほとんど欠くことでコキジノオゴケと区別されてきたが、近年は両種は同一種として扱われている。
産地情報	広島市 (安佐北区), 三次市, 安芸太田町 (戸河内)

野口 彰 1952. 日本の蘚類 (一) クジャクゴケ科. 服部植物研究所報告, 7: 1-22.

Kruijer, J. D. 2002. Hypopterygiaceae of the world. Blumea, Suppl., 13: 1-388.

(山口富美夫)

クロカワゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Fontinalis antipyretica* Hedw.

蘚類 カワゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は水中で流れに沿って伸び、長さ 20~30 cm、北方では 1 m 近くにもなるが、広島県のものとはそれほど大きくはなく、不規則に分枝し、植物体は黒褐色。葉は茎に 3 列につき、卵形で、長さ 3~8 mm、縦に折り畳まれて茎をはさむ。葉の先端は尖り、葉縁に細かい鋸歯があり、中肋はない。葉細胞は線形。蒴は短い枝の先につき、葉の間から少し出る。水中に生育するほかの蘚類からは、葉が 3 列に茎につくこと、中肋がないことで容易に区別できる。北海道、本州のほか、北半球の寒冷な地帯に広く分布している。
生息・生育状況	湿原中の流水、冷涼な水の流れる河川の石や朽木上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	森林伐採や水路の改修により、生育環境の悪化が危惧される。
特記事項	—
産地情報	庄原市（西城、高野）、北広島町（芸北）

Welch W. H. 1960. A Monograph of the Fontinalaceae. 357 pp. M. Nijhoff, The Hague.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

コシノウスグロゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Leskea polycarpa* Hedw.

蘚類 ウスグロゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎ははい、不規則に羽状に分枝し、長さ 2~3 cm、植物体は暗緑色で光沢がなく、乾くとやや縮れる。枝につく葉は広い披針形で、先端は尖り、長さ約 1 mm、中肋は太く、先端近くで消える。葉細胞は六角形で 1 個のパピラがある。胞子体は長さ 10~15 mm、蒴は直立するかやや傾く。コパノキヌゴケ属 ( <i>Haplocladium</i> ) の蘚類に似るが、コメバキヌゴケ属では茎に毛葉があり、葉先が長くのび、蒴が屈曲しているので区別できる。北海道、本州のほか、北半球の寒冷な地域に広く分布する。
生息・生育状況	自然林内の樹幹や岩上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	生育地は自然林内に限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	安芸太田町（戸河内）、北広島町（芸北）

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

ヒロハシノブイトゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Trachycladiella aurea* (Mitt.) M.Menzel

蘚類 ハイヒモゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は枝や樹幹から長く垂れ下がり、20~30 cm、植物体は光沢のない黄緑色。葉は三角形で先端は長く伸び、長さ2~2.5 mm、茎にやや偏平につく。葉縁には細かい鋸歯があり、中肋は葉の中部で消える。葉細胞はひし形で、細胞壁に沿って多数のパピラがあり、そのために顕微鏡で見ると暗く見える。ハイヒモゴケ科の他の属からは、植物体に光沢がないこと、葉細胞に多数のパピラがあり、暗く見えることで区別できる。関東地方以西の本州、四国、九州、琉球列島のほか、中国、台湾、ヒマラヤ、東南アジアに分布する。
生息・生育状況	自然度の高い森林中の湿度の高い溪谷で、樹木の枝や幹、ときに岩面から垂れ下がるようにして生育する。このような生態を下垂蘚類といい、葉上苔類とともに熱帯地方のコケの生活形である。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林内の溪谷部に限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	広島市(安佐南区, 安佐北区, 佐伯区), 三次市(甲奴, 作木), 廿日市市(佐伯, 宮島), 安芸高田市(高宮), 安芸太田町(筒賀), 神石高原町(神石)

Noguchi A. 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. J. Hattori Bot. Lab., 41: 231-357.

Menzel M. & Schultze-Motel W. 1994. Taxonomische Notizen zur Gattung *Trachycladiella* (Fleisch.) stat. nov. (Meteoriaceae, Leucodontales). J. Hattori Bot. Lab., 75: 73-83.

(山口富美夫)

キャラハラッコゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Taxiphyllum taxiphylloides* (Ando & Higuchi) Higuchi

蘚類 キャラハゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は横にはい、長さ3~6 cm、不規則に羽状分枝し、葉は扇平に茎につき、背腹性がある。葉は長さ1.3~1.8 mm、やや鎌形に曲がり、しわがある。葉の中肋は葉長の1/3に達し、葉縁に鋸歯がある。キャラハゴケ属( <i>Taxiphyllum</i> )のほかの種とは、葉にしわがあり、中肋がはっきりしていることで区別される。ハイゴケ属( <i>Hypnum</i> )の種とは、葉縁に鋸歯があり、葉の基部に大きな透明細胞がないことで区別できる。本州、四国、九州の石灰岩地のほか、韓国、台湾、極東ロシアに分布する。
生息・生育状況	石灰岩地の森林内で、石灰岩上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	石灰岩地の石灰岩上に生育が限られており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	本種はラッコゴケ属( <i>Gollania</i> )の蘚類として記載されたが、Higuchi & Bakalin(2013)によってキャラハゴケ属( <i>Taxiphyllum</i> )に組み換えられた。なお、キャラハゴケ属はこれまでハイゴケ科に含められていたが、Ignatov ほか(2012)はキャラハゴケ科として独立させることを提案し、最近の分子系統解析によってもキャラハゴケ科の独立性が認められている。
産地情報	庄原市(東城), 神石高原町(神石)

Ando H. & Higuchi M. 1981. *Gollania taxiphylloides* Ando et Higuchi, sp. nov. and *Gollania japonica* (Card.) Ando et Higuchi, comb. nov. (Hypnaceae, Musci) from Japan. *Hikobia* Suppl., 1: 189-195.

Higuchi M. & Bakalin V. A. 2013. Taxonomic position and a new locality of *Gollania taxiphylloides* Ando & Higuchi (Hypnaceae, Bryophyta). *Hikobia*, 16(3): 289-291.

(山口富美夫)

## ササオカゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Sasaokaea aomoriensis* (Paris) Kanda

蘚類 ヤナギゴケ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	大形のゴケで、茎は長さ 10~20 cm に達し、不規則に羽状に分枝し、黄緑色。茎には多数の毛葉がある。茎につく葉は卵状披針形で凹み、長さ 3~4 mm、先端は鋭く尖り、鎌形に曲がる。先端に近い葉縁に細かい鋸歯がある。中肋は 1 本で、葉の長さの 3/4 に達する。葉細胞は線形で、細胞壁は薄い。葉の付け根の細胞群はあまり分化しない。茎に毛葉があることで、ほかのヤナギゴケ科の属から容易に区別できる。本州、四国、九州のほか、韓国の済州島、台湾に分布する。
生息・生育状況	湿地、放棄水田、池沼の縁で、草本の根元の湿った土上、あるいは半ば水没した状態で生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	湿地の開発などによって生育地が減少している。
特記事項	—
産地情報	三次市

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物ゴケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

土永浩史・鶴沢美穂子・秋山弘之 2020. 紀伊半島南部のササオカゴケ. 蘚苔類研究, 12(5): 130-132.

(山口富美夫)

## イトヒバゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Cryphaea obovatocarpa* S.Okamura

蘚類 イトヒバゴケ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	一次茎は横にはい、二次茎は立ち上がり、高さ 3~4 cm、不規則に分枝する。葉は卵形で、長さ 1.5~2 mm、先端は鈍く尖り、中肋は太くて葉の 3/4 に達する。葉細胞は不規則な多角形で、細胞壁は厚く、背面の先端に 1 個のパピラがある。蒴柄は短く、蒴は倒卵形で葉に沈生し、外から見えない。ヒジキゴケ ( <i>Hedwigia ciliata</i> ) に一見似ているが、ヒジキゴケの葉には中肋がなく、葉細胞に数個のパピラがあることで容易に区別できる。本州、四国のほか、中国大陸に分布する。
生息・生育状況	クワ、カキノキ、ウメの樹幹上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	自然林内よりも里山のような環境を好むようで、クワやカキノキの古木に着生する傾向がある。里山の場合は現状を維持するような管理が必要であり、生育地での開発行為や森林伐採などの人為的攪乱を抑制する必要がある。
特記事項	—
産地情報	庄原市 (東城)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物ゴケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

トサヒラゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Pengchengwua obtusata* (Mont.) S.Olsson, Enroth, Huttunen & D.Quandt

蘚類 ヒラゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	一次茎は短くはい、二次茎は斜めに立ち上がり、長さ2~3 cm、葉を偏平につけ、光沢があり、黄褐色、短い枝を少数つける。葉は舌形で先端は円く、長さは1.5~2 mm、横じわがあり、中肋は葉の中部で消える。葉細胞はひし形で、細胞壁はくびれ状に肥厚する。リボンゴケ ( <i>Planicladium nitidulum</i> ) は著しい光沢があり、葉にしわがない。セイナンヒラゴケ ( <i>Neckeromnion calcicola</i> ) にも似ているが、セイナンヒラゴケはより大形で、葉のしわが強く、石灰岩上に生育する。関東地方以西の本州、四国、九州、琉球列島、小笠原諸島のほか、中国、ベトナムに分布する。
生息・生育状況	自然度の高い森林内で、やや乾いた岩上や樹幹上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林内に限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。生育する個体数が少なく、個体群もきわめて小さい。
特記事項	—
産地情報	廿日市市 (宮島)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

Olsson S., Enroth, J. Huttunen S. & Quandt D. 2016. Phylogeny of *Neckeropsis* and *Himantocladium* (Neckeraceae, Bryophytina). *Bryoph. Diversity & Evol.*, 38(2): 53-70.

(山口富美夫)

キブリハネゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Pinnatella makinoi* (Broth.) Broth.

蘚類 ヒラゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	一次茎は短くはい、二次茎は斜めに立ち上がり、長さ3~5 cm、葉を丸くつけ、光沢がなく、若い葉は緑色が残っているが、成長すると黄褐色となる。二次茎は規則的に分枝して羽状になる。葉は被針形で先端は尖り、中肋は葉端近くに達する。葉細胞は不規則な多角形で細胞壁にはくびれ状肥厚がほとんどない。ヒラゴケ科の他の属からは光沢のないことで肉眼でも区別できるが、むしろシノブゴケ科の蘚類に似る。シノブゴケ科蘚類の葉細胞には著しいパピラがあることで区別される。中部地方以西の本州、四国、九州のほか、中国に分布する。
生息・生育状況	自然度の高い森林中で、やや乾いた日陰の石灰岩壁上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限定されており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	庄原市 (東城), 神石高原町 (油木, 神石)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

イヌコクサゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Neobarbella comes* (Griff.) Nog.

蘚類 トラノオゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	一次茎は短くはい、二次茎は垂れ下がり、長さ 5~10 cm, まばらに分枝する。葉を丸くつけ、やや光沢があり、淡緑色。葉は卵形で凹み、先端は急に尖り、長さ 1.5~2 mm, 中肋はないか短く 2 又する。葉細胞は線形で、パピラはない。ハイヒモゴケ科の蘚類に似るが、本種の葉には中肋がほとんどなく、葉細胞が細い線形でパピラがないことで区別できる。本州（中国地方）のほか、中国大陸や東南アジアに分布する。
生息・生育状況	石灰岩峰のイワシデーイワツクバネウツギ群集中のチョウセンヒメツゲなどの樹枝から垂れ下がるようにして生育する。やや乾いた環境のようにも見えるが、付近にはムチエダイトゴケやムギランなどの着生植物が生育していることから、霧がかかりやすく空中湿度が高いものと推察される。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限定されており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	神石高原町（神石）

安藤久次 1969. 帝釈峡におけるチョウセンヒメツゲ上の着生蘚苔類. ヒコピア, 5(3-4): 177-178.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

カトウゴケ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) CR+EN-②

*Palisadula katoi* (Broth.) Z.Iwats.

蘚類 ナワゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	一次茎は横にはい、二次茎は立ち上がり、高さ 3~6 mm, 密に葉をつける。植物体は光沢のある黄緑色で、しばしば赤味を帯びる。葉は卵形で、深く凹み、長さ 1~2 mm, 先端は急に鋭く尖り、葉縁に細かい鋸歯がある。中肋を欠くか、不明瞭で二又する。葉細胞は不規則な六角形で、細胞壁は著しくくびれて肥厚する。近縁のキノクニキヌタゴケ ( <i>P. chrysophylla</i> ) がしばしば本種と混生するが、キノクニキヌタゴケはやや小形で、葉があまり凹まず、先が徐々に尖ることで区別できる。中部地方以南の本州、四国、九州のほか、中国大陸に分布する。
生息・生育状況	自然度の高い森林中や林縁部の花崗岩岩壁で、ややオーバーハング状になったところに生育する。花崗岩以外の岩石に生育することはほとんどない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林に限られており、森林伐採などの影響を受けやすい。
特記事項	本種が属するカキネゴケ属 ( <i>Palisadula</i> ) は、これまでヒムロゴケ科 (Pterobryaceae) に含まれていたが、Goffinet & Buck(2004)の分子系統解析の結果、ナワゴケ科 (Myuriaceae) に含まれることが明らかになった。
産地情報	広島市 (佐伯区), 三原市 (久井), 大竹市, 廿日市市 (佐伯, 宮島), 安芸太田町 (筒賀)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

Goffinet B. & Buck W. B. 2004. Systematics of the Bryophyta (mosses): from molecules to a revised classification. Molecular Systematics of Bryophytes (Goffinet B, Hollowell V. & Magill R., eds.). Monographs in Systematic Botany, 98: 205-239. Missouri Botanical Garden Press, St. Louis.

(山口富美夫)

**ムチエダイトゴケ** 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) CR+EN-②

*Haplohymenium flagelliforme* L.I.Savicz

蘚類 キヌイトゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: CR+EN

広島県 2003: CR+EN

概要	茎は長さ 5~10 cm, 長く伸びて垂れ下がり, 短い枝を不規則に分枝する。枝先は小さい葉をつけて長くむち状に伸びる。植物体は褐緑色で光沢はない。葉の基部は卵形で, 先端は長く伸び, 鋭く尖り, 長さ 0.5~1 mm。本種は, 葉の先端部に反り返ったとさか状の突起があることが特徴である。本州, 九州の石灰岩地のほか, 中国大陸東北部, 極東ロシアに分布する。
生息・生育状況	石灰岩峰のイワシデーイワツクバネウツギ群集中のチョウセンヒメツゲなどの枝から垂れ下がって生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩地に限定されており, 石灰岩地での森林伐採, 林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	本種が属するイワイトゴケ属 ( <i>Haplohymenium</i> ) は, これまでシノブゴケ科 (Thuidiaceae) に含まれてきたが, Buck & Vitt(1986)はキヌイトゴケ科 (Anomodontaceae) として独立させることを提案し, この分類学的見解が一般的になっている。
産地情報	庄原市 (東城), 神石高原町 (神石)

安藤久次 1961. *Haplohymenium flagelliforme* (ムチエダイトゴケ新称) 日本にも産す. ヒコピア, 2(3): 178.

Buck W. R. & Vitt D. H. 1986. Suggestions for a new familial classification of pleurocarpous mosses. *Taxon*, 35: 21-60.

(山口富美夫)

**ツボゼニゴケ** 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Plagiochasma pterospermum* C.Massal.

苔類 ジンガサゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	ゼニゴケの仲間で, 葉状体をなし, 長さ 1~3 cm, 幅 3~4 mm, 表面に気孔が散生する。葉状体の断面では気室が 4~6 層に重なり, 腹面には先端に 3 本の突起をもつ赤紫色の腹鱗片がある。雌雄同株。雌器托は葉状体の途中につき, 柄は 0.5~1 cm。雌器托は丸くてミカンに似ており, ミカンゴケの別名をもつ。本種に酷似するジンガサゴケ ( <i>Reboulia hemisphaerica</i> , 普通種) は陣笠様の雌器托をもち, その柄は 5 cm に達し, 腹鱗片の突起は 2 本なので区別できる。北海道, 本州, 四国, 九州の石灰岩地のほか, 東アジアからヒマラヤに分布する。
生息・生育状況	石灰岩地帯の溪谷で, 湿った岩に群生する。とくに溪流が石灰岩壁をえぐってオーバーハング状になった部分に見られることが多い。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は石灰岩壁に限られており, 石灰岩地での森林伐採, 林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	庄原市 (東城), 神石高原町 (油木, 神石)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

樋口正信・安藤久次 1987 (1988). 帝釈峽の蘚苔類. 帝釈峽の自然. 帝釈峽総合学術調査報告 (帝釈峽の自然刊行会, 編), p. 201-235. 帝釈峽の自然刊行会, 東城 (庄原).

(山口富美夫)

ヤワラゼニゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Monosolenium tenerum* Griff.

苔類 ヤワラゼニゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	ゼニゴケの仲間で、コンブのような葉状体をなし、長さ2~4 cm、幅5~8 mm、その名のとおりにゼニゴケやジャゴケに比べると柔らかく、葉状体内部には気室もなく、表面に気孔もない。葉状体の腹側には線形の腹鱗片が4列ある。雌雄同株。雌器托は葉状体の先端につき、円盤状で、周辺がくびれている。雌器托の柄は短く約5 mm、2筋の溝がある。雄器托は盤状になる。ミズゼニゴケ属( <i>Pellia</i> )の苔類に似るが、ミズゼニゴケ属の細胞の油体は小形で多数あるのに対し、本種は大形で1個である。本州、四国、九州、琉球列島のほか、台湾、中国、インドに分布する。
生息・生育状況	住宅地周辺の窒素分の多い裸地、水辺の湿ったコンクリート壁上などに生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	水辺のコンクリート壁などは比較的安定した生育地であるが、住宅周辺の生育地は不安定で、保全するのは困難である。
特記事項	—
産地情報	呉市(呉)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

ホソベリミズゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Sphagnum junghuhnianum* Dozy et Molk.

蘚類 ミズゴケ科

環境省: DD

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	茎は直立し、長さ10~15 cm、ときに20 cmに達し、岩壁から垂れ下がることもある。密生して生育し、しばしば直径が数十から1 mの大きな塊になる。植物体はふつう淡緑色で、冬季には赤褐色を帯びることがある。茎葉は三角状の舌形で、長さ1.2~1.6 mm、枝葉は卵状披針形で、長さ1.4~1.8 mm、著しく凹む。オオミズゴケ( <i>S. palustre</i> )やウロコミズゴケ( <i>S. squarrosum</i> )に比べると枝が細く、柔らかい。枝葉の腹面の貯水細胞には大きな孔が葉縁細胞に沿ってあり、背面には小さな孔が数個中央に並んでいる。中部地方以西の本州、四国、九州のほか、中国、東南アジアに分布する。
生息・生育状況	夏緑広葉樹林内で、花崗岩や流紋岩などの酸性火成岩類の湿った岩壁上に群生する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林内の湿潤な岩壁にほぼ限られており、森林伐採や林道整備などの影響を受けやすい。
特記事項	Suzuki(1955)では、本種は <i>S. junghuhnianum</i> subsp. <i>pseudomolle</i> として扱われ、和名はコバノホソベリミズゴケと呼ばれていた。熱帯アジアのミズゴケ類を研究したEddy(1977)は、 <i>S. junghuhnianum</i> の形態的変異を広く認め、subsp. <i>pseudomolle</i> を含めて一つの分類群としてまとめている。本著ではEddy(1977)の考えに従って、学名を <i>S. junghunianum</i> 、和名をホソベリミズゴケとしている。
産地情報	広島市(佐伯区)、大竹市、東広島市(河内)、廿日市市(宮島)、安芸太田町(加計、簡賀)、北広島町(芸北)

Suzuki H. 1955. Variations in *Sphagnum junghuhnianum* var. *pseudomolle* Warnst. and the status of *Sphagnum kiiense* Warnst. J. Jpn. Bot., 15: 186-198.

Eddy A. 1977. Sphagnales of tropical Asia. Bull. Brit. Mus. (Nat. Hist.), Bot., 5: 359-445, pl. 37-40.

(山口富美夫)



コアナミズゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Sphagnum microporum* Warnst. ex Cardot

蘚類 ミズゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	茎は直立し、高さ 10~15 cm、枝を放射状につけ、上から見ると枝は巴状に回旋する(ユガミミズゴケ節の特徴)。植物体はふつう緑褐色であるが、酸化鉄を沈着して黒色を帯びることがある。茎葉は三角状の舌形で、長さ約 1 mm、枝葉はやや歪んだ卵状披針形で、長さ 1.5~1.6 mm、著しく凹む。枝につく葉の貯水細胞の背腹両面に小さな孔が多数ある(腹面の方が多)のが特徴で、これが和名の由来である。本州、四国、九州のほか、中国大陸や朝鮮半島に分布する。
生息・生育状況	湿原内の水がよどむような場所に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	生育地が限られているため、湿原の開発によって生育地の減少が危惧される。
特記事項	—
産地情報	三次市(君田, 三良坂), 庄原市(西城), 大竹市, 安芸高田市(甲田), 北広島町(芸北), 世羅町(甲山)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

クマノゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Diphyscium lorifolium* (Cardot) Magombo

蘚類 イクビゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	茎はきわめて短く、細長いひも状の葉を密生する。葉は長さ 6~12 mm、中肋が葉の大部分を占め、断面では楕円形。植物体は暗緑色で、乾くと金属光沢を帯びる。胞子体は短い柄をもち、蒴は歪んだとっくり状。蒴は 5 月頃に熟し、夏には消失する。近縁のカシミールクマノゴケ ( <i>D. kashimirensis</i> ) は、葉が乾くと著しく縮れ、中肋の両側の葉身部が発達するが、これはまだ広島県から見つかっていない。本州、四国、九州のほか、朝鮮半島、中国大陸、カシミール地方に分布する。
生息・生育状況	溪流の湿った岩上や滝つぼ周辺の岩上に生育する。花崗岩や流紋岩などの酸性火成岩上に生育が限られる。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	遊歩道沿いの溪流の岩上などでは、踏圧による個体群の減少が認められる。生育環境が限られるため、森林伐採や遊歩道の整備に留意する。
特記事項	本種を含むイクビゴケ属 ( <i>Diphyscium</i> ) はこれまでキセルゴケ属 ( <i>Buxbaumia</i> ) とともにキセルゴケ科 ( <i>Buxbaumiaceae</i> ) に含まれていたが、近年の分子系統解析から、イクビゴケ科 ( <i>Diphysciaceae</i> ) として独立させるようになった。
産地情報	広島市, 呉市, 三次市(作木), 大竹市, 廿日市市(廿日市, 佐伯, 宮島), 安芸高田市(八千代), 安芸太田町(加計, 戸河内), 北広島町(芸北, 豊平)

野口 彰 1935. 日本産ちようじごけ類蘚類図説. 植物研究雑誌, 11(4): 267-275, pl. II.

Frey W. & Stech M. 2009. Marchantiophyta, Bryophyta, Anthocerotophyta. Syllabus of Plant Families, Adolf Engler's Syllabus der Pflanzenfamilien. 13th edition, Bryophytes and Seedless Vascular Plants (Frey, W. ed.), p. 9-263. Gebrüder Borntraeger, Berlin & Stuttgart.

(山口富美夫)

## ホンモンジゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Scopelophila cataractae* (Mitt.) Broth.

蘚類 センボンゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	茎は直立し、高さ 5~20 mm、密生して塊となり、植物体は暗緑色。葉は茎のまわりに密につき、狭い舌状、長さ約 2 mm、先端は尖る。葉細胞は不規則な六角形で、表面にわずかにざらつきがある。無性芽をつける。同属のイワマセンボンゴケ ( <i>S. ligulata</i> ) は本種より大形で、無性芽をつけず、葉の先端は円いことで区別される。本州、四国、九州のほか、東南アジア、インド、ヒマラヤ、北米、南米に分布する。
生息・生育状況	銅など重金属イオンを含有する地上や岩上に生育する。このようなコケを「銅ゴケ」と呼んでいる。しばしば、社寺の銅葺の屋根の下や銅像の土台などに群生する。県内でも神社や銅山、タングステン鉱山跡地などで見られる。
存在を脅かす要因・保全の留意点	人為的な影響を受けた場所に生育するため、本種を保全するにはその生育環境を維持する必要がある。
特記事項	—
産地情報	広島市 (東区), 呉市 (下蒲刈), 三原市 (三原), 尾道市 (尾道), 東広島市 (安芸津)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

## ホゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Racopilum cuspidigerum* (Schwägr.) Ångstr.

蘚類 ホゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	茎ははい、不規則に羽状に分枝し、長さ 3~5 cm、芝状に密生するのでシバゴケの名もある。茎の下面には仮根が顕著である。葉は茎に 3 列につき、左右両側に並ぶ大きな側葉と背面につく背葉とがある。側葉は長さ約 2 mm、中肋が著しく突出して、葉身部の 1/5 ほどの長さに達する。この突出部が穂状になることからホゴケの名がついた。葉細胞は不規則な六角形。地面をほう蘚類の中で、本種は側葉と背葉をもち、葉の中肋が著しく突出することから容易に区別できる。中部地方以西の本州、四国、九州、琉球列島、小笠原諸島のほか、中国、東南アジア、オーストラリア、太平洋諸島、中米に分布する。
生息・生育状況	林内の湿潤な溪谷や林縁部の岩上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地が限られているため、森林伐採、林道や歩道の整備に留意する。
特記事項	—
産地情報	広島市 (佐伯区), 福山市 (福山)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

Zanten B. O. van 2006. A synoptic review of the Racopilaceae (Bryophyta, Musci). 1. Asian, Pacific and Australasian species of the genus *Racopilum*. J. Hattori Bot. Lab., 100: 527-552.

(山口富美夫)

コウヤトゲハイゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Brotherella nakanishikii* (Broth.) Nog.

藓類 コモチイトゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	茎ははい、不規則に羽状に分枝し、長さ3~7 cm、植物体は黄緑色で強い光沢がある。茎につく葉は広い被針形で、長さ1.2~1.5 mm、先端はやや急に尖り、葉縁は全縁。中肋はなく、葉の基部に膨れた大きな細胞が1, 2個ある。茎は断面で周辺に大きな細胞がある。カガミゴケ ( <i>B. henonii</i> ) に似るが、葉の幅が広いこと、葉縁が全縁であること、茎の断面で周辺に大きな細胞があることで区別できる。日本の固有種で、中部地方以西の本州、四国、九州に分布する。
生息・生育状況	花崗岩や流紋岩などの酸性火成岩域の自然度の高い森林中で、腐植土や腐木上に生育する。コウヤマキと共存する傾向がある。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林内の限られた場所であり、森林伐採などの影響を受けやすい。
特記事項	本種が属するカガミゴケ属 ( <i>Brotherella</i> ) はこれまでナガハシゴケ科 (Sematophyllaceae) に含まれていたが、近年の分子系統解析によって、コモチイトゴケ科 (Pylaisiadelphaceae) に含まれることが明らかにされた。
産地情報	広島市 (佐伯区)、大竹市、廿日市市 (佐伯、宮島)

Noguchi A. 1984. Notulae bryologicae, XI. J. Hattori Bot. Lab., 57: 63-70.

Frey W. & Stech M. 2009. Marchantiophyta, Bryophyta, Anthocerotophyta. Syllabus of Plant Families, Adolf Engler's Syllabus der Pflanzenfamilien. 13th edition, Bryophytes and Seedless Vascular Plants (Frey, W. ed.), p. 9-263. Gebrüder Borntraeger, Berlin & Stuttgart.

(山口富美夫)

ヒメスズゴケ 絶滅危惧Ⅱ類(VU) VU-②

*Forsstroemia cryphaeoides* Cardot

藓類 ヒラゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	一次茎ははい、二次茎は長さ1.5~2 cm、まばらに分枝し、互いにもつれあって下向きに垂れ下がり、褐緑色で光沢はない。葉は卵形でしだいに長く伸び、先端は尖る。中肋は葉の中部より下で消える。蒴は葉の間に沈生し、帽は無毛。ヒナイトゴケ ( <i>F. japonica</i> ) に似るが、ヒナイトゴケ二次茎は密に羽状に分枝し、蒴の帽に毛がつくことで区別できる。本州、四国、九州のほか、中国大陸、朝鮮半島、極東ロシアに分布する。
生息・生育状況	山地の比較的乾いた樹幹上に着生する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	森林伐採などによる環境の変化によって、個体群の消滅が危惧される。
特記事項	本種が属するスズゴケ属 ( <i>Forsstroemia</i> ) はこれまでイトヒバゴケ科 (Cryphaeaceae) に含まれていたが、近年の分子系統解析によって、ヒラゴケ科 (Neckeraceae) に含まれることが明らかにされた。
産地情報	庄原市 (西城、東城、比和)、廿日市市 (宮島)、安芸太田町 (加計、筒賀、戸河内)、神石高原町 (神石)

野口 彰 1947. 日本、琉球、台湾イタチゴケ亜族及びメリンスゴケ亜族の藓類 (其一). 服部植物研究所報告, 2: 27-79.

Frey W. & Stech M. 2009. Marchantiophyta, Bryophyta, Anthocerotophyta. Syllabus of Plant Families, Adolf Engler's Syllabus der Pflanzenfamilien. 13th edition, Bryophytes and Seedless Vascular Plants (Frey, W. ed.), p. 9-263. Gebrüder Borntraeger, Berlin & Stuttgart.

(山口富美夫)

**ウキウキゴケ** 準絶滅危惧(NT) NT-b

*Riccia fluitans* L.  
苔類 ウキゴケ科

環境省: なし  
広島県 2011: NT  
広島県 2003: NT

概要	葉状体は細く、二叉分岐をくりかえし、水面に浮くか泥土上に生育し、色は淡緑色。幅 0.5~1.2 mm, 長さ 1~5 cm。葉状体の内部に気室が散在する。本種はこれまでウキゴケと呼ばれてきたが、従来のウキゴケには、少なくとも 4 種含まれていることがわかった (古木 2020)。その 1 種が本種のウキウキゴケであり、ウキウキゴケは雌雄異株、葉状体の幅が 0.5~1.2 mm で、根元が海綿状にならず、腹枝を欠き、腹鱗片が半円形であることなどで近縁種から区別される。
生息・生育状況	流水中、池沼や水田に生育する。水面近くに浮遊したり、水がひいた後の池や水田の泥土上に生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	かつては水田で普通に見られたが、除草剤の使用で激減した。水質の保全が本種の個体群の存続に影響する。
特記事項	最近の研究で、従来ウキゴケと呼ばれていた苔類には複数の種が含まれていることがわかり、狭義のウキゴケについては、和名がウキウキゴケに改められた。
産地情報	呉市 (安浦)、庄原市 (庄原, 西城, 東城), 大竹市, 東広島市 (西条, 福富)

片桐知之・古木達郎 2018. 日本産タイ類・ツノゴケ類チェックリスト, 2018. *Hattoria*, 9: 53-102.  
古木達郎 2020. 新・コケ百選 第 21 回ウキゴケ科. 蘚苔類研究, 12(4): 106-117.

(山口富美夫)

**イチョウウキゴケ** 準絶滅危惧(NT) NT-a

*Ricciocarpos natans* (L.) Corda  
苔類 ウキゴケ科

環境省: NT  
広島県 2011: CR+EN  
広島県 2003: CR+EN

概要	植物体は葉状体となり、二叉状に分枝してイチョウの葉形のようになり、長さは 1~1.5 cm, 幅 4~6 mm。葉状体内部に数層からなる気室があり、気室孔は明瞭。腹鱗片は紫褐色で長く、リボン状になる。本種は水に浮かんで生育することが多く、その生態的特徴とイチョウの葉のような葉状体をつくることから、野外でも容易に見分けられる。北海道、本州、四国、九州、琉球列島のほか、世界に広く分布する。
生息・生育状況	水田や池に浮かんで生育する。稲刈り後の水田では、湿った泥土上に生育している。
存在を脅かす要因・保全の留意点	除草剤の使用、ため池や水田の減少などにより、生育環境が悪化し、生育地が減少している。
特記事項	過去には水田や池などで普通に見られたが、除草剤の使用や池沼の水質悪化などにより激減した。ただし、出現頻度は低いものの、稲刈り後の水田で湿った泥土上を丹念に探すと見つかることが多いことから、県内の水田などに広く分布していることが予想される。個体数が減少していることから、準絶滅危惧に相当する。
産地情報	広島市 (安佐南区), 庄原市 (西城, 東城), 東広島市 (西条), 廿日市市 (大野, 佐伯, 吉和), 安芸高田市 (高宮), 安芸太田町 (加計, 戸河内), 北広島町 (芸北), 神石高原町 (油木)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

**オオミズゴケ 準絶滅危惧(NT) NT-b**

*Sphagnum palustre* L.

藓類 ミズゴケ科

環境省: NT

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	茎は直立し、長さ 10~15 cm、ときに 30 cm 以上に達する。茎は密生し、湿原では広い範囲に群生するが、山地の湿った路傍や岩上などで小塊状。植物体は白緑色~赤褐色。枝は放射状に出て太く、ウロコミズゴケのように葉が反り返ることはない。茎の表皮細胞にはらせん状の肥厚があり 1~4 個の孔がある。茎葉は舌形で先端はささくれ、枝葉は長さ 1.5~2 mm、広い楕円形で深く凹む。枝葉の背面の貯水細胞には数個の孔がある。枝葉の横断面で葉緑細胞の形は三角形、葉の腹面側に露出する。北海道、本州、四国、九州、琉球列島のほか、世界に広く分布する。
生息・生育状況	沿岸部と島嶼部を除く、県内のほぼすべての市町に分布する。島嶼部では宮島のみ分布する。湿原の主要構成種となるほか、山地の歩道沿いや放棄水田など湿った土、岩、花崗岩岩壁上などに生育する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	園芸目的で盗掘されることがある。
特記事項	—
産地情報	県内全域

Suzuki H. 1956. Studies on the Palustria group of the *Sphagnum* of Japan. J. Sci. Hiroshima Univ., ser. B, div. 2, 7: 153-172.

Eddy, A. 1977. Sphagnales of tropical Asia. Bull. Brit. Mus. (Nat. Hist.), Bot., 5: 359-445. pl. 37-40.

(山口富美夫)

**マツムラゴケ 準絶滅危惧(NT) NT-b**

*Duthiella speciosissima* Broth. ex Cardot

藓類 ハイヒモゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	大形の藓類で、茎は横にはい、長さ 5~15 cm、不規則に分枝し、大きな群落を形成する。植物体はやや光沢のある黄緑色で、半透明な感じがする。葉は長さ 3~4 mm で、卵形の基部からしだいに長く伸び、葉の上部は波うってしわがあり、葉縁には細かい鋸歯がある。葉の基部の両側は耳状にふくらむ。葉細胞は長い六角形で、細胞壁は薄く、細胞面には 1 個のパピラがある。ノコギリゴケに似るが、ノコギリゴケは ( <i>D. flaccida</i> ) 小形で、葉はやや扇平につき、葉細胞に 2~6 個のパピラがあることで区別される。関東地方以西の本州、四国、九州のほか、中国大陸に分布する。
生息・生育状況	自然度の高い湿った溪谷の岩上、樹幹基部などに群生する。石灰岩地に多い。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地は自然林内に限られており、森林伐採などの開発の影響を受けやすい。
特記事項	本種が属するノコギリゴケ属 ( <i>Duthiella</i> ) はこれまでムジナゴケ科 (Trachypodaceae) に含まれていたが、Quandt & Huttunen(2004)は、分子系統解析から、ノコギリゴケ属がハイヒモゴケ科 (Metesoriaceae) に含まれることを明らかにした。
産地情報	竹原市、福山市 (福山、新市)、庄原市、安芸太田町 (戸河内)

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

Quandt D. & Huttunen S. 2004. Evolution of pendent life-forms in bryophytes. J. Hattori Bot. Lab., 95: 207-217.

(山口富美夫)

**セイナンヒラゴケ 準絶滅危惧(NT) NT-b**

*Neckeromnion calcicola* (Nog.) S.Olsson, Enroth, Huttunen & D.Quandt

藓類 ヒラゴケ科

環境省: なし

広島県 2011: NT

広島県 2003: NT

概要	大形の藓類で、一次茎は短く横にはい、二次茎は長く垂れ下がり、長さ10~20 cm、ときに30 cmを越え、ところどころで短い枝を分ける。植物体は光沢のある淡緑色で、ところどころ赤褐色を帯びる。葉は茎の両側に偏平につき、舌形で、先端は切れたようになり、長さ2.5~3 mm、強い横しわがあり、中肋は1本で短い。葉細胞は楕円形で、細胞壁は厚く、くびれがある。近縁種については、トサヒラゴケの項を参照。関東地方以西の本州、四国、九州、琉球列島のほか、中国大陸に分布する。
生息・生育状況	やや乾いた石灰岩壁から垂れ下がるようにして生育し、しばしば大きな群落を形成する。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育環境は自然林内の石灰岩壁に限られており、石灰岩地での森林伐採、林道や遊歩道の整備などの影響を受けやすい。
特記事項	—
産地情報	福山市、庄原市（東城）、神石高原町（油木、神石）

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

Olsson S., Enroth J. Huttunen S. & Quandt D. 2016. Phylogeny of *Neckeropsis* and *Himantocladium* (Neckeraceae, Bryophytina). *Bryoph. Diversity & Evol.*, 38(2): 53-70.

(山口富美夫)

**キブネゴケ 情報不足(DD) DD-a**

*Rhachithecium nipponicum* (Toyama) Wijk & Margad.

藓類 キブネゴケ科

環境省: CR+EN

広島県 2011: AN

広島県 2003: DD

概要	茎は直立し、高さ3~4 mm、数本が集まって塊となり、植物体は白緑色で柔らかい感じがする。葉はへら形で、長さ2 mm弱、中肋は葉の先端の下で終わる。葉細胞は六角形で多くのパピラがある。蒴は葉の間からわずかに突き出し、西洋ナシ形で、乾くと縦じわができる。蒴歯はない。タチヒダゴケ属 ( <i>Orthotrichum</i> ) の藓類に似ているが、タチヒダゴケ属藓類は葉の細胞壁が厚く、植物体は暗緑色で堅い感じがする。日本の固有種で、本州にまれに分布する。
生息・生育状況	サクラなどの樹幹上に生育する。関太郎によって1954年に採集されているが、それ以来確認されていない。
存在を脅かす要因・保全の留意点	生育地、被着生樹木に限られており、被着生樹木を含む周囲の環境保全に留意する。
特記事項	—
産地情報	安芸高田市（八千代）

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

イブキタチヒダゴケ 情報不足(DD) DD-a

*Orthotrichum cupulatum* Hoffm. ex Brid.

蘚類 タチヒダゴケ科

環境省: DD

広島県 2011: VU

広島県 2003: VU

概要	茎は直立し、高さ約 1 cm、数本が集まって団塊状となり、植物体は暗緑色。葉は茎のまわりに密につき、長い卵形、長さ約 3.5 mm、先端は尖る。葉細胞は不規則な多角形で、1 または 2 個のパピラがある。タチヒダゴケ属 ( <i>Orthotrichum</i> ) の近縁の種からは、蒴が葉の間から少し出て、外蒴歯が 8 対あることで区別できる。日本の固有種で本州に分布する。
生息・生育状況	林内の樹幹上に生育する。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	林内の落葉樹の樹幹上に着生していたものと考えられるが、記録にある生育地からは再確認されていない。生育する個体数が少なく、個体群も小さいものと考えられる。
特記事項	Noguchi(1968)が三次市から報告しているが、それ以降県内で本種の生育は確認されていない。評価するための情報が不足している。
産地情報	三次市

Noguchi A. 1968. Musci japonici. VIII. The genus *Orthotrichum*. J. Hattori Bot. Lab., 31: 113-129.

Suzuki T. 2014. Notes on *Orthotrichum* (Orthotrichaceae, Bryopsida) in Japan. Hattoria, 5: 1-50.

(山口富美夫)

カワゴケ 情報不足(DD) DD-a

*Fontinalis hypnoides* Hartm.

蘚類 カワゴケ科

環境省: VU

広島県 2011: AN

広島県 2003: DD

概要	流水中に生育し、茎は水に流れて長く伸び、10~20 cm、クロカワゴケよりは小形である。植物体は黒褐色。葉は 3 列に茎に並び、卵形の披針形で中肋を欠き、長さ 5 mm くらいで、折りたたまれることはなく、平坦で茎につく。葉細胞は線形で、細胞壁は薄い。葉が平坦であることでクロカワゴケから区別される。北海道、本州のほか、北半球の寒冷な地域に分布する。
生息・生育状況	冷涼な流水中に生育する。Welch(1960)が、 <i>F. duriaei</i> として「安芸、可部」から 1911 年に採集された標本を引用している。広島からの記録はこれのみであり、その後見つかっていない。
存在を脅かす要因・ 保全の留意点	生育地が限定され、個体数が少ないものと予想される。
特記事項	—
産地情報	広島市 (安佐北区)

Welch W. H. 1960. A Monograph of the Fontinalaceae. 357 pp. M. Nijhoff, The Hague.

岩月善之助(編) 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp. 平凡社, 東京.

(山口富美夫)

